



# 「協創」が導くBIMの未来

- ラウンドテーブル参加企業
- 梓設計
  - 久米設計
  - 安藤ハザマ
  - 戸田建設
  - 西松建設
  - 三井住友建設
  - 船場
  - SUGIKO
  - 文化シャッター

## 発注者メリット感じてもらうために



「BIMデータが最終的に誰のものなのかを突き詰める」と発注者も改めて考えるべき。梓設計の松澤氏も「最終的に発注者がBIMのメリットを感じてもらうことが目的」として、設計段階から施工段階を経て、完成後の維持管理まで「BIMモデルがつながる流れを確立する」と重要性を説く。

## データ循環のルール化

### 協創

知見合わせ解決策導く

「BIMデータが最終的に誰のものなのかを突き詰める」と発注者も改めて考えるべき。梓設計の松澤氏も「最終的に発注者がBIMのメリットを感じてもらうことが目的」として、設計段階から施工段階を経て、完成後の維持管理まで「BIMモデルがつながる流れを確立する」と重要性を説く。



「BIMデータが最終的に誰のものなのかを突き詰める」と発注者も改めて考えるべき。梓設計の松澤氏も「最終的に発注者がBIMのメリットを感じてもらうことが目的」として、設計段階から施工段階を経て、完成後の維持管理まで「BIMモデルがつながる流れを確立する」と重要性を説く。

顧客やパートナーとの「協創」によって最適解を導くBIMコンサルティングを展開するPLUS.1（東京都千代田区、高木英一CEO）が創立1周年を記念してディスカッションイベント「BIM-PLUS.1ラウンドテーブル2025」を開いた。参加したのは各分野でBIMを先導する梓設計、久米設計、安藤ハザマ、戸田建設、西松建設、三井住友建設、船場、杉孝（SUGIKO）、文化シャッターのBIM推進担当21人。冒頭、高木CEOは「BIMデータが各業界を越えてつながり、様々な課題を解決する。各分野の専門家が課題解決に向けて連携する協創の流れを大きなムーブメントにしていきたい」と力強く語った。議論のテーマは「BIM推進」「標準化」「協創」の3つ。ラウンドテーブルを通して日本のBIMの進むべき方向性を探る。

## BIM推進

普及へ業務課題を共有  
設計事務所やゼンコンで社を挙げてBIM導入を進める動きが顕明にみられる。多くの企業がBIMの推進を要する。その軸に社内普及を図っている。ラウンドテーブルには9社から推進役の21人が参加した。PLUS.1の高木氏は「BIM普及に向けて取り組んでいる業務上の課題を共有することで、普及に向けて進むべき方向性を導きたい」と呼び掛ける。



高木CEO

「設計事務所は建築設計、構設計、設備設計の統合プロセスにおいて、業務効率と協創を両立させることが重要だ」と、業務効率と協創を両立させることが重要だ。BIM推進は、生産プロセス全体を見据えて、BIMデータ活用による協創を構築していくが、設計者「次工程にデータを活用する」と意識を持って、クリエイティブな部分で根拠出しにデータを使うことを優先し、かつその見方もあり、部分最適ではなく、全体最適の視点から各部門がBIMデータ活用に向き合えることが求められる。BIM推進は、生産プロセス全体を見据えて、BIMデータ活用による協創を構築していくが、設計者「次工程にデータを活用する」と意識を持って、クリエイティブな部分で根拠出しにデータを使うことを優先し、かつその見方もあり、部分最適ではなく、全体最適の視点から各部門がBIMデータ活用に向き合えることが求められる。BIM推進は、生産プロセス全体を見据えて、BIMデータ活用による協創を構築していくが、設計者「次工程にデータを活用する」と意識を持って、クリエイティブな部分で根拠出しにデータを使うことを優先し、かつその見方もあり、部分最適ではなく、全体最適の視点から各部門がBIMデータ活用に向き合えることが求められる。

## BIM確認申請が普及の追い風

### 標準化

規制にならない枠組みとは  
BIMを軸に業務フローを確立するためには、データ標準化への対応が不可欠だ。PLUS.1の高木氏は「BIMの普及には標準化が欠かせないが、行き過ぎた標準化は規制になり兼ねない」と、標準化の難しさを説明する。BIMを軸に業務フローを確立するためには、データ標準化への対応が不可欠だ。PLUS.1の高木氏は「BIMの普及には標準化が欠かせないが、行き過ぎた標準化は規制になり兼ねない」と、標準化の難しさを説明する。

「BIMを架け橋」として、  
既成概念を超えた  
「協創」を推進する。

BIMプラスワン

Thinking outside the bim